掌中嵐雪發句集 二編 全

掌中嵐雪發句集二篇

春之部

改旦

元日や　鶴〳〵うゝくいう鶴あり

年すてゝ水ゆく遠ゝ乃庵目うる

三つの朝　三夕ゝ書を　日々ゝさん

美水ゝ　鏡面の鶴を磨うゝゝ

ゆゝゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

楪乃世所弥聚ふりや吉原

夢ゆめく浪花ふるやや泊船寺

時雨はく見乃めれといきうし

人くよ笑られ行なりと

ようらふをそのやはつ稼の玉はく朱

雪と苦く雪に鄙樂まる美葉式

憶篇と客中

裾折く葉をつくもくん茅花

春朝

蔀あけてくるまち雲ん新まる紀

風波くるすかれる夢う邪

當

當をあめく世八き村まる見

うくひすの霜とそ見れ小摺神

卯月梅

白雪ゆ梅を待むや梅の花

梅の咲く梅をめけうる月哉

荏柄天神奉納

こゝれ梅ゝ〳〵けなさゝきゝ哉

翁の春も中ゝこゝ〳〵ゝ

中ゝゝれ〳〵白きを集へ行〳〵

ゝゝ梅を遥ゝ肖ひ山ひう哉

梅干ゝ見知ゝ〳〵ゝ梅の花

柳

目ゝ年枝ゝく鶯や　柳かけ

中納言孫房

於馬場殿龍馬ゝ付て直諫ゝ

ゝゝゝ〳〵ゝ其言行未聞

乳母屋ゝ風の柳を手乃弟子

春の水ゝ秋の水紫を　柳　鯲

物詩乃墨ゝ〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵

ゝゝ〳〵ゝ〳〵ゝ火燈の〳〵ゝ梅ゝ

喜風乃石紙引切るれの南
皆と門人ども〻う様豆乃多
端石と杉るとてかくや寸之
第根ま
ゑるア関と毫紙新勢ま
紙書
糸つる人と杉ふや風巾
沙弥惟然へ中杉る作る

末の秋年ゑはしかるも風巾
我等今日開佛音教觀喜踊躍と
涙流しまりる
嬉しゆう念佛おとり乃柄杓ま
出うまも
出かはりや初ゑ年と知られ
喜積俳
相柳　民濃年　業俳ゑう郷

上巳

磯〳〵雛見とゝ小家哉

汐干よ

多摩の馬方かきもの笠の鞘

桃

わの〳〵や桃の席や等持院

菖

なつかしや爪あかるる花の山

逍遥鵬鷃之間出入是非之境

花の爰世界を写せる墨けるろ

花ゆゑも毛出小なるし 嘉 櫻

それ桜〳〵松へゆゑ 雲 この那

新叢ゑう花折ゆゑや 山おろし

小町賛

我ゑよ目も鼻を爰花の色

原の宿を通ゑ勅使の饗京まで陽ゑて

海道も藤をはらうの山も対交ゑ形ゝ書ふ
ゆふを時と清くうひきそう物のきそれぬ
上くれらふふ高しの風をなんときくくんも
松をくくふきくくを富士を井の家人を見る
人を任合形る橋よ系合をり
富士をうんぬ要くん人も行くん花の山
要くを要し桃花も云をくをれをう
覓くふを見ぬ形ゝさ見ゝくく

立志退善

山ふきのうつりく黄ある泉ゝ那
を安代義を普化の師晉子八洛海の
怨子三十年某八面年かく年を見て
他のつくをかせるれくふ来ゆよくく半日と
吐沒ゝくに遠跡を止めを春を義文を負
ゝを大悲虎へ奉 喰ふ行乞

中陰迴向

普化去りぬ匂ひ殘りて花乃雲

亡跡

葉の花や坊う戻まつ果みな

三七日

夢ゝや弓ゝよ陰ゝ事 法の鶴

墓参

山ふゝの實を穴堀乃 秋ひゝ

夏之部

更衣

ものゝ子供傍ゝ白かゝ

角出坊乃粟

老ひゝ川ゝ色城荷ゝ衣

伊勢法樂

ゝ鶴ゝ松移ゝ郭公

綿帳の鶯世を美戸や置亀

たちまちに花を吟ひもたてまつり時雨

冠里公

ありかつるまきの山乃郭公

時雨降そ世の根付う那

砌に雨を賞賛かけて ゆけ時雨

卯花

夢もなく老うときぬ花卯木

信田の葛よ或傷ものとふ

ゆ年紀潔を人ふ数へよかさねる

牡丹

ふの鑑盛なるへきるなんす

義仲寺師父之廟

老うしかうるかう青あらし

新樹

黄鶯を降うる彩樹の烟雨

孫兵衛ケ岡

並松の引列めるし反本之
ゝゝゝ蓬ゝゝく
蓬の根もみゝうく成ぬおしいつ
うゝく蘇の姿よ見ゝる　鶯八　晋子
ゝゝ姿ゝ戯る
下部等ゝ鶯ゝくハすする見ゝ佛
門外の弟子路ゝうし狩猟の姿の
奥めうく八十路を口うぬ塵外又里

の山蔭ゝうて霞の雫に合殿雫を寄生
うゝせかゝひゝく秋の花のゝゝ以芽ゝ
いゝくかゝゝゝひうゝせ絡ふ
秋ゝせゝかゝかもすゝう山乃奥
氷見へ頼義ゝうゝ張ゝて
沢深乃霧よゝうゝ乃飛子ゝ南
筆
作の子や児の歯くゝ弱ゝけゝき

掉青流亡妻
[illegible]

蝸牛

公務や角に月をもつ蝸牛

坂本の若き[illegible]
大きさ公の蝸牛に似たる太刀の拵か
[illegible]
[illegible]

うり貳貳貳貳家[illegible]
[illegible]
大津の驛にわく　古貝足
あちらこちらを五器に盛るや[illegible]
大津の樹に入[illegible]の句あまきさかな成
[illegible]
[illegible]

端午

一月見せんなりや　きくの　五節
わや　ゑん　寿賀　茂の　能樽　いせの　義日
舞　もちく　ひとつ　なり　稲　又　把
新　ほく　仮　程　縄　年　あらへ　乃
獨座
春の　こる　裾　こ　縄　乃　折　ふ　こ
うち　歌く　年　待　こ
あれ　と　重　外　こ　見　へ　ぬ　故　寿　乃　邪

旅意
萍の　實　も　い　さ　紅　よ　う　こ　水　躍
紀の　山　き　よ　海　海　よ　り　江　よ　入　る　禹　益　乃
み　を　流　く　実　拾　を　も　る　苔　ふ　流　外　山　表　な
ゆ　り　な　る　カ　ホ　キ　ヤ　な　と　い　ふ　を　津　流　根　の　人
の　こ　る　西　よ　流　き　ん　な　ら　目　前　よ　南　な　ん　な　る　の
消　よ　な　ら　ん　は　や　よ　き　る　を　鬼　ふ　も　せ　よ　人　ゆ　せ　を
ま　流　れ　ら　流　藤　森　こ

蛇いちこ書 弓掘 文婦へれ
和泉式部の墓 本家の里一里彼式部の月のさいりと
御ふるあとといふ
朝の雲 雲の跡 雲のいりし 文
飛鳥井助 千津川近き河のうへ乃ほとり之除田
百又十石代かりとり家ふたり立れと立れ
今も平家こ
川骨乃花一時も 立春 初夏

妻驪詣 文より略
荊の花 裾さしかりし 旅ゝろを
梶原屋しきと乃る所人家さとり
又等ゝ遊せられも歌も孫拍の情も
ゝれる人ゝも彩ふしの印すきゝもきゝえやゝ
まゝしをいくきゝ飛ゝ出ゝ
一族をいひしぬゝいゝある宿孔のつき
ゝるゝ旧跡めゝれ又覚行りて

むかしのゝき中又者もありけゝの花

瓜

児の手乃至ゆゑもあるまゝ素弓

御堂関白殿法性寺忌日義家朝臣系図

の時南殿より早瓜をたてまつりゝ小侍士

毒気ありゝなりゝ義家弓作て瓜を

割たる毒気則出下略

瓜切ゝさゝの数乃 光の事

氷花を妻ゝゝあひたる事いとゝ

ゝて出ゝ

あてゝゝ子ゝ乃粉おゝゝ乃も散ゝすて

左盤木のちゝや母さへ子さへ

ゝち養るかと成ひ作りて

山者のおろゝゝちきゝや乃月乃

附者の二郎ゝ三郎ゝおとゝはまゝ乃れを

乃月乃の端居ゝゝゝ平乃とゝゝ乃り

亡母を夢見る

ゆめ覚て我襲出や母恋し

伏見橋本所

能松やうく咲そめしより也長寛なる

古風あるへし

明晩こゝ来る歌迄送る歌 五月雨

明くれのく歌よ伏見や 夏の月

仲菴ひさ伏るとて

夢覚て蘇よむ時ぬ先の白露

かゝるの涼

来るゝの影水清ふすみゝ那

涅槃を涼とあるく歌的な

一雅貴弧まるて皆中まるゝ

伏りゝ

味噌すゝ食 鱗の 游う那

祇園の會七日の洋古るの山猪より

綿よりも見えあるの只萩桔梗いろ〻 松尾
芭蕉も素袍は太刀とさして器量の
はずかしからぬ雑式なり〻厳重
なる男装束の拵えたるに持て行く姿も
作りの非者せいぶり〻むまく宮められ
る一二の園を設めて威儀厳重な
中糸作りとて車を繰て町を引る

何の月よりか作りきん
きて白もゆきもれ鋼や紙屋の舎
移徙の祝儀
とてあつらへ新よいまたる徳利式
清水 月ちあり略
扇をそうあめそれ清水の片系鞍
序合沾洲ちなみ作りて京より
大和歌の作をもとめんと出立

けるを踏わけもして

神奈川の岱乃信濃ふ先進め

紀伊路井ゝ清水摂州より名を

すゝうゝく道まて もるゝ山清水

笠の菴

夕まゝら屋 蔦子うけ角る斤ひさし

影しらに

すゝ後ゝろ羽黒のさゝに交尾死

切味噌のひまゝ奥さゝ 夜泊り

芭蕉の墓まゝりの作ゝ 義仲菴へ

易行ゝ堂を出奔せゝられゝ

住持まゝ 拂ひ果りゝ 夏氏堂

秋之部

初秋

洛外乃 辻堂いゝ川 秋の風

閑居

瘦る身をさそふ秋の風

大伽藍造営ましくるを書く

おとに聞きしるし富士築波根の高き空

山ひろ山果てるとこのふかひもちく

成へきかとありけり

上野より見やる 信濃川 河

湖水のけうとく浮や星 使

名月の夜ふかんはりうとし

七夕を隔と思ふうさ世の郭

七夕や賀茂川に流る牛車

さもあらぬ天の川

落 の音ぞまさりて

張源舟の淋しさくる落の郭

茶碗銘

黒茶碗あぶ花の銘ふまくく落

雲ふ夕ふいとく黒 肥後青乃黒を

さくて圓秋年皐をとゝれるく
つゝ爪ゝのまゝ者へし

撿校　貧僧　大黒　小く弦
ゝゝの子　子の子　小雪花

三代目をけんとりの愛こゝを粧
あき色味あれ秘てたけく殘せ
松むしのゝんともいたれ蒸菜碗
底食水香あしの湯を強く地獄めゝと

いゝとなり却て法華の温化蝶情の花
蓋をあり去るゝ
おのれ〻〻餓鬼〻似るよきゝく
十歳年成る童の身はゝりるれ
弱者りのもゝもも　赤乃雫
鶏肉

味噌ゝく煮て吟食ゝ鶏髭
鶏肉ゝ餐のたきさん　煙　う郎

妻悼

戸ゝ和拾枝かるゝやおもてもし

蓮の骨かくれそめ美女の戸ゝ和

里有姫ゝ[illegible]ひきるゝ書ル

鬼灯のさもれそ[illegible]ふも鈴ふ

盆會

魂祭ゝ霧も滅をわゝゝ那

魂まゝり母屋の素戸の音ハ何

相撲

角力ゝり蕪ハや妹のかゝ弾

秋蕎

立ぬくゝ[illegible]歩や秋のゝれ

ちかゝく吾面くゝす秋の蕎

宝象

舟多ゝ海屋の秋の夕ゝ郷

草誓上人之岩室

燕乃かへりてうちあり〳〵の面

江之橋

日を海も海士の焼くや初あらし

江の釜の穴をうつるや　秋の雨

霧ヶ岡の枝生　舎弟とともに行者

の月うけて雲より下ればやうり伝楽の

笛よ歌ふくうたれぬ時を八幡宮の森より

月ちへ〳〵よ楽人名ちてくはるう社僧

雲ふ似くさきれ初さ出る祇のこゑ

歌をなる年陸下藝ちつまで杉の嵐

もゑうをとゝめの如

為帽子ふくく白さの花皆小田の一

月

名月や柳の枝を考へ吟く

旅泊

幾矢ふ雲年　三五とよふ琴を

仕合なる岨の松ふる郭　ふるの月
書そこなる松を書きりふるもち月
清涼繁震のふるまなる
ふれまるゆまる
新月や内行不乃　株の草
名月や歌人なる　難のちぎぐさ
書陽の叱と呼つ　きつの月
名月紙　固友坊　男　の郭

去臭き　鍬まるめしけるの月

鎌倉大佛

明月を南をはるう　佛頂珠
名月や　ふ　ふ　ふ　ふ　ふる　ふの寿
言笑ひ　月見ふる人不見さげう

月出る頃

郭不寝さる牛の黒きを　秋の月
ところ　ふ　ふ　ふ　の小貝の　磯の月

[illegible]

八九月頃やいつこのかゝり乃貝

穂ゝよりく垂の井の田も晴もな

ゝ高も鉢さひりろよ　山里冬

[illegible]略

[illegible]をぬる篇う和

毬栗や　まこさけこる法の場

秋のゝれ井の塩乃かゝとゝん　舟竹

とゝふく土産稲こゝれる子人丸の柿の実

山の色の栗のかゝゝふのはちのあまりるゝと

笑眞ゝ多

榧のかゝよゝ野ゝ山乃本ち實見と

標茅（シメジ）

林間ゝ蓑蔵する日せ行角の兎

くちゝ[illegible]とな[illegible]ほゝめされそ　板茸

菊

蓼根よりのぞきたるなり蓼は岸
一名稚りなるもこれ菊の名
勝下圓哲子燕ス
さくら香さくらの山陰の高蹈
山陰のあちこちや菊よ板さけ
さく源のやまさ笠よ鮭の魚
何とも露
まり風の里を粉するしられる

病床より風をとる辨
ちくさ身ちこちの繼ぎの程うさ
くとしはるかに仮はふのまし高る物
まりかくさくさ病くを上より敬し
ちかちの孫二章より渠うさ高と
窟に居るに白さ肉黒さ腸呼吸す
はまて動揺ゆるく眼ちくくと見
多見るかの六河かめちくく怒けるる獲摩

堂に倚しまくら王尊に似たり虎にも
戯ひ龍と争ふ忘し滅や必死の人の
康まんかの如り戻りて向さむきゆるむと
了示本州まへ及へられいまだ死ましさ來や
あり孫ひむきく行悩ろしとられたう
侍とも覚ゆれおのれか欲ぬ我て変えての虫にわたと
れる右の人は歌うさえぬを爽の為れなれも
今や身かろうしへ侍宵の有るまひも

あの孫やれ去へきを叢出にゆりたる鬼
の子なれはうかく世にうらとく果刻れたる
業せの中とことそいと拙きあれ負様の中に
質を清く禪に滑りぬひ绝えにかゝれて
人乃血氣を犯し吸ふて彼子の鐵牛
を噛むよるを称変しきわせ涯の孫れる
亦しも火とりの中に紳されつりと飛ひ来
桃の角にかくくさ恥をみ佇しされぬされ

真如の性乃きてる蚤や摩竭なれとも
以る魚乃大百由旬より蟭螟の微
細なるまてを行まうて憎愛かとる事
れ〳〵と去乃見れ内裏まもち祈けるか
到〳〵の御灯の光まを一夜あらしを拾
なれまるに物の化ろを法りるとう
知識の肌を到まうひて徳をおれ
ういろれるもさるへき因縁なや柱乃

穴まをたらへ多四年の怨人まへ
報をもけもなれさりいうの道てんと
かをひのう除をうちをいうち
れの人乃年を後へとあるもへ見へに
こ六もしつるを猛てのなり赤れと
れ〳〵測まを物為せ人の報てを新
をうれをくをを号もあるをに見東
雲の見もあるみをてぬ自分方衣被

[illegible]
[illegible]の[illegible]の[illegible]
冬之部
[illegible]
[illegible]の[illegible]旅　女房とともに
[illegible]川亭にて
[illegible]のわらぶきまで[illegible]
時雨

[illegible]と[illegible]時雨めまぐれ少なく
[illegible]や[illegible]る時雨の[illegible]
京にて
やうやう[illegible]森[illegible]や　東山
[illegible]袋に[illegible]る衣[illegible]と女房[illegible]
法華[illegible]
沉著世樂無有慧心
[illegible]ぬ　火[illegible]

あまくゝ引人の有 赤大根
午とりふ一ふ歌
萱原や枯うけろひく馬乃嚢
水雪
玲瓏の氷り冷る月冬し
薄ゝ何を啗ひ しけ乃かと
影表集
雜汁をつゝく叢平藏る なる歌

海嵐
海嵐啗ふ人さ多然ゝあらお俳逢
海嵐多みもむつゝき夢独伯
雪
門の雪臼とたゝひのすゝう那
外の雪百歩の馬屋見茶せり
御築地のうちをおゝ作り雪平
めぐこの嶽より初る月の南門をかゝて

[illegible]

かゝるの花よ月色こゝぼそしひらう郡

菓子盆やそも拾ひいろは色ろは

沢菴の義氣せるや色のかゝ

義ありと知らん 色の 光の郡

叡

武士の思ふ 米こくあられ氣

[illegible]

今ふし [illegible] 弾打

東海子かてるれや豊

津さゝの鎌よ 東子や [illegible] の者

おもへる色 泣れ笑ふれとしの者

と一枚 輾弾さし 日乃嵐

人汁 粉 さきまて浮 世よあるも

そ世沢菴の芭蕉もいまとうくし

かり者る秋相の樂の一紫とへと告う

殺へるまんとおもひもくれ侍りて
鈍くしてとよもむ人おもく多のられ
八十さとりの古猫の崩もとゝ成なりて
老よいろ皇さしく成て多と
もりあるりあまくいつ南氣乃刀を
のられる世界の幸ともとゝ多も苦裏
いつれも猫まて寿よ世くのられ
彩の梭 梅を探るれ出侍つ多

俳諧集艸第九集

掌中嵐雪發句集 二編

江戸本石町十軒店　英大助